

## 内容のおもしろさに着眼した授業実践

高度学校教育実践専攻  
教員養成特別コース

氏 名 藤山仁司

キーワード: 内容のおもしろさ、授業実践、教材研究

実習責任教員 藤原伸彦

実習指導教員 江川克弘

### 1. 大学院授業および基礎インターンシップに 基づく課題設定

#### ① 大学院授業における実践と省察

##### 【実践】

P1 時の授業「教職協働実践演習Ⅰ」では、小学校3年生「三角形」の単元導入を実践した。本時のねらいは、二等辺三角形と正三角形を理解することであった。

##### 【省察】

(1) 単元導入であることを十分に意識できていなかった

本授業は、単元「三角形」の第1時なので、単元の見通しを児童に持たせられるようにしなければならない。模擬授業では角についての見通しがたてにくいようになってしまっていた。導入部で、既習事項である直角三角形や直角についても触れる時に、児童から角に注目するという言葉が出るようにすることで、見通しがたてやすくなったのではないかと。

(2) 本時導入で興味関心の喚起が不十分であった

教科書の図を使って、何でできているか考える、という活動を導入部で行った。しかし、ただ見つけるだけなので面白さがあまりなく、引き付けられる内容ではなくなってしまった。

(3) 発問の意味が不明瞭であった

導入時の発問も、「何でつくられているのかな」と材料を聞いているのか、形を聞いているのかどちらか分からないようになってしまっていた。

(4) めあて、展開の活動、まとめのつながりがあやふやになっていた

本時のめあては、「いろいろな三角形を仲間分けしよう」であったが、この表現では仲間分けして学習が終わりになってしまう。仲間分けして、二等辺三角形や正三角形について知ることにも学習に入ってくるので、このこともめあての中に盛り込まなくてはいけない。まとめでは、二等辺三角形と正三角形の定義だけになってしまっているため、めあての仲間分けとつながっていない。仲間分けした中で、特別なものとして二つの三角形が名前ついているというように、仲間分けしたことについても触れられるようにしなければならない。

#### ② 基礎インターンシップにおける実践と省察

##### 【実践】

基礎インターンシップでは、鳴門教育大学附属小学校第6学年において、社会科「近代国家に向けて」の授業を行った。本授業は5時間中

3時間目であり、日清日露戦争後の日本の様子について理解することをねらいとしていた。

#### 【省察】

成果：

児童との話し方、板書の書き方など授業の基本的な進め方については、大学院での授業で現職院生と省察した際に評価を頂けたため、成果であると考えている。しかし、教材研究不足など課題も多くある。

課題：特に課題であると考えている点は、内容の面白さを児童が感じられていなかったことである。内容の面白さとは、それぞれの学習内容が持つ様々な性質のことであり、その性質には、難易度、生活との関連性、価値観などであると考えている。本時については、多面性のことであると考えている。1つの出来事でも多くの面があり、1つの視点だけではなく様々な視点から見ると違ったものに見えてくるという面白さがある。授業の中の話合い活動は楽しんで行っている様子が見られた。しかし、授業後に児童に感想を聞いてみると、話すことができ楽しかったという、活動自体の楽しさについての意見が目立ったものの、内容を面白いと感じたという感想はほとんど見られなかった。もちろん活動が魅力的であることは大切であるが、内容のおもしろさを感じることでより学習内容の定着や学習者の意欲向上につながると考える。内容の面白さを感じられなかったのは、今回の授業では、3つの観点で日本の様子を分ける活動を行ったが、調べた内容を個人、グループ、全体で共有し、分類して整理するだけになってしまっていたためではないかと思われる。分類整理して用語を覚えるだけの授業はおもしろくない。

おもしろい授業にしたいという思いはあったが、このような結果になってしまった。そのようになった原因は、事前の教材研究の際に、ねらいや目標から活動をメインとして考えてしまい活動ありきのものになったためであると考えている。歴史の出来事を単一の視点から見るのではなく、様々な視点から見てほしいという思いがあったため、様々な観点から出来事を分ける活動が良いのではないかと思い、展開部の活動にした。しかし、活動をして終わりという形になってしまい、学んでほしいこと、考えてほしいことが児童に伝わっているのかが、把握できないようになってしまった。解決案として、教材研究の際に内容のおもしろさを明確にし、それに基づいて児童が自分ごととして考えることができるように授業をつくっていくことが大切であると考えている。内容のおもしろさは、教科、単元によって異なる。

#### ③ 総合インターンシップに向けた課題設定

大学院での授業や基礎インターンシップでの実践から、内容のおもしろさを生かした授業ができていないことが、特に私の課題であることが明らかになった。課題を解決するために、総合インターンシップでは以下のことに取り組んでいきたい。まず、おもしろさを精緻化する。特定の教科、単元に焦点を当てて、内容のおもしろさとは何かについて、精緻にしていきたい。そのために、文献にあたることや配属先の先生方など様々な人が考えるおもしろさを聞き、自分の考えと合わせながら、おもしろさを明確にしていきたい。次に、おもしろさをどのように授業に生かせるのかを考え実践する。おもしろさを児童が感じるためには授業の中でどのような活動や発問、流れにすればよいのかを

考えたい。いくらおもしろさが明確になっても、授業にうまく生かせなければ児童がそのおもしろさを感じることは難しくなる。どのように生かせられるのか、様々な方法を考えながら、授業をつくっていく。

## 2. 総合インターンシップにおける実践と省察

### ① 実践の方法

総合インターンシップでは、鳴門市内の小学校で第4学年を対象に、算数科「図を使って考えよう」(1/2時)を実践した。本時の目標は、3要素2段階の問題を、問題文から必要な数量を抜き出して、それらの数量の関係と必要な情報を整理して、「順にもどして」解決するという考え方を身に付けることであった。今回の実践では、教材のおもしろさを、図と順にもどす思考法の2つから考えた。

### ② 実践の結果

児童が図を使って問題を考えている際の机間指導から、図も式も書いており自分なりの解き方ができていると考えられる児童や、図はかけていないが式や答えは出ている児童、全く手がつけられていない児童がいた。全く手がつけられていない児童が全体の2割程度だった。また、授業後に児童に感想を聞いたところ、図が使いやすいと思ったと答えた児童は少なかった。

### ③ 成果と課題

成果：

実践後の実習校や大学院の先生方との振り返りで、電子黒板等の操作や全体への問い返し、ペア活動については、良かったとの言葉を頂けたので、成果であると考え。

課題：

(1) 図を使うことの良さを十分に伝えることができなかった

まず、問題の提示から児童が考える活動に至るまでの流れについてである。今回の実践では、問題を提示し、問題文の中で分かっていること、求めることを丁寧に確認して、問題を理解してから、児童が図を使って考える時間を取るようにした。しかし、私の研究課題である図を使うことのおもしろさは感じにくくなってしまった。一般に、図は、その場面を理解するために使うことが多いと考える。具体的な場面がイメージできないからこそ、問題文にあるように物事の起こった順に、要素を1つずつ増やしながら図を描き、時には描いたものの一部を消して新しいものを描くなどしながら、場面を理解していく。図の有用性はそこにあると考える。その視点から、実践前には、児童が描く図は教科書にあるようなものになると想定していた。だが実際に児童が描いたのは、最終的に生じた結果の方から戻していくような図であった。確かにこのような図も、児童が考えたことがわかるものになっており、良いものであったと考える。だが、本来的な図をつかうことのおもしろさ、図の有用性を感じられるようにするためには、問題文の中の情報を整理し、問題を理解するために図を使うようにする方がよかったのではないかと考える。改善案としては、問題文は読むだけにしておく。児童には、これまで問題を解くときにはどんなものを使ってきたのかを問いかけ、児童がこれまでの方法を思い出す時間を取る。それから、今回の問題を児童が考える時間に進む。そうすることで、どうにかして解こうとするようになり、様々な解決方法を試そうとすると考えられる。また、図も児

童それぞれ違う図が出てくると考えられる。学ぶおもしろさである、試行錯誤する機会が生まれたり、様々な図、考え方に触れることもできたりする。

## (2) 児童の考えを十分に生かせなかった

今回、私は図の有用性と順にもどす思考法の2つのおもしろさがあると考えた。順にもどす思考法は、分からないものが1つずつ分かってくおもしろさがあると考える。1つが分かれば、それが次のヒントになり、次が分かればまたその次のヒントになりと繋がっていく。謎解きのようなおもしろさがあると考える。児童は、1つずつ解き進めており、児童がかいた図からもそれが分かった。児童は、まず全体の値段からお茶の値段を引いて、次にノート1冊の値段を求めることができていた。しかし、私はこの児童の図を取り上げたが、この図ではなく教科書の図を使って説明を行ってしまった。児童の図を使うことで、児童も認められていると安心することができると考える。また、1つずつ順に考えていくことをより実感することができたのではないかと思う。

## 3. 今後の展望

今回の研究では、内容のおもしろさがどのようなものであるのかについて考えた。学ぶということのおもしろさがあり、それに加えて教材自体にもおもしろさがあると考える。教材のおもしろさについては、学習する場という狭い範囲ではなく、広く一般的な範囲で考えていく必要があると感じた。学校教育だからと特別に考えすぎるのではなく、社会では、学校以外では他の視点からも考えることが大切であると考える。指導法については、児童の意見の取り上

げ方をより大切に、手法も幅広くする必要があったと感じた。学ぶ主体はあくまでも児童であり、考えたものが積み重なることで学びが深まり、広がっていく。今回実践させていただいたもの以外の教材についても、教材の面白さは今後考えていきたい。考える際には、初めて学ぶ者としての視点を大切にしていきたい。学んできた自身の経験から面白さを考えることだけでは偏ってしまうため、別の視点から考えることも必要になる。論文や他の先生方に聞くことも大切である。そして、面白さを具体的にしていきたい。大学院での授業や小学校でのインターンシップを通して、多くのことを学ぶことができた。授業や生徒指導、学級経営の手法ももちろんそうであるが、特に児童が主体であるという意識の大切さを改めて学ぶことができた。長期のインターンシップで授業をしたり、生徒指導の場面に出会ったり、じっくりと児童と向き合う中で、まだ教員がやってあげないと、という気持ちがあることに気付いた。もちろん教員が引っ張っていく場面も必要である。しかし、それ以外は児童がやっていくものである。児童が主体であるためにどうサポートしていけばいいのかについては、大学院の授業で学ぶことができた。理論や手法をただ学ぶだけではなく、それを自分ならどう活用するのか、一度自分自身に落とし込んで、より実践を意識して考えることができた。また、それを実際に活用してみ、反省して、また活用法を考えるという流れを繰り返していくことができた。今後教員として児童と向き合っていく中でも、主体は児童であることを常に意識しながら、そしてその理想を達成できるように常に学び続けていきたい。